

ザラした舌ざわりにスッパイものでした。なれるにつれこのスッパさがよくなったものです。とにかくひもじくて何か食べるものはないかと話し合うのは、ぼたもち・赤飯・おやき等そのつくり方等々食べ物のお話を尽きなくしたものです。

日本人はまことに器用なものでダイナマイトの針金で縫い針、導線の皮膜から縫い糸、ダイナマイトのろう紙からちり紙といったぐあい。二年目から壁新聞、日本新聞等が掲示されるようになりました。我々も日本字が懐かしく壁新聞の編集の一員になり、共産党宣言などを詳解する仕事もしていました。

その年の夏帰ることになったある日、物干し場で小学校、商業学校、軍隊、カラカンダでも一緒という友達と会い（彼は炊事員）私の冬服、彼の夏服を交換し、再会を約して帰りました。カラカンダから貨車でナホトカまで約一か月、舞鶴に上陸、我が家への到着は昭和二十二年十月十二日、氏神様の祭礼の日でした。

しかし、ひもじくて栄養失調、凍傷、事故等で不運にも死んだ多くの戦友がいます。私もその一人を見送

りましたが、土が凍ってツルハシを振るっても氷をかくようではほんの少ししか掘れません。寒いし疲れているので、いつまでも頑張ることができず、遺体の上はその氷片を乗せてお別れしました。本当に死んだ人はいわいそうです。今、シベリヤ会として平田市に百十人の会員がおりますが、会うごとに憶んでいる次第です。

## 第四十五收容所二か年の記

島根県 箱 上 春 市

一、終戦からシベリア收容所に至る

中支湖北省当陽、宜昌付近にありて戦っていた第三十九師団（藤部隊）は昭和二十年四月中旬夜行軍により満州へ転進を開始、七月下旬師団主力は奉天から新京の間に到着したが、八月十五日疲労こんぱいのうちに終戦となり、同月下旬武装解除、そして涙の中に軍旗を奉焼、大命によって一戦も交えぬソ連軍に従い九

月上旬四平街郊外の楊木林に集結、関東軍の一部（戦車隊と鉄道隊）とともに千五百人ずつの集成大隊を編成されたのである。

私は集成第五大隊に編入されて工兵第三十九連隊長今井中佐の指揮下に入ったが、第五中隊長富永大尉の急死により当該中隊長を命ぜられ、二百五十人（歩兵第二三二連隊第七中隊、同第十中隊の二個分隊、同連隊の混成二個分隊及び鉄道隊の一個中隊）を指揮して九月十五日ソ連の軍用列車により楊木林駅を出発、四日目の朝シベリア鉄道に入ったが、満州出發時ソ連の輸送指揮官（大尉）の言った「日本人を朝鮮經由で帰国させるのは危険だからウラジオストクから日本の港に直行させる」とは裏腹に、列車は西北方に向かって走り出したのである。

「なぜうそをつくんだ、ウラジオストクから日本へ帰すと言ったではないか」と抗議したが、大尉はとほけて「おれは命令に従っているだけだ」と、車中における談判も押し問答に過ぎなかった。

シベリア鉄道第一日の夕刻、落胆した若い弱い兵士

二人がショックで死亡したが、集成第五大隊の最初の犠牲者で痛ましい限りであった。

「我々はシベリア送りだ、牛馬のごとく働かされるのだ」と半ば諦めてはいたものの、ともかくにも広漠たるシベリアに驚くばかり、林の中を二日間走ると思えば、大平原を三日というように、ことにバイカル湖畔を丸二日と列車は西へ西へと走り続け、バイナルから支線に入りウラル山脈、パミル山麓のザッシーア駅に着き下車したのが十月二十八日であった。

そして約十キロ行軍で収容所へ、折から猛吹雪となりシベリアの冬到来の早いのに驚きながら収容所に入り、無理をして運んだ梱包はもちろん被服糧秣を残らず剝奪され外套、雑のう、水筒だけの丸腰となったのである。

五棟（五段）の古びた収容所は後日知り得たウスカメノゴルスク第四十五収容所第二分所で、我が第五中隊は最下段第五棟の土間で体を寄せ合い寒さに震えながら一夜を明かしたが、翌朝二十数台の大型トラックが待機していた。

集成第五大隊は工兵連隊（久野大尉以下五百人）を残し今井大隊長以下主力はトラックに分乗しアルタイ山脈を越え、翌日タウスカメノゴルスク郊外にある第三分所に収容されたのであった。

十一月十五日から全員の身体検査があり一級から四級に区分され、一級は地下三百メートルの鉱山作業、二級は地上の土木作業、三級は収容所内の軽作業、四級は入院入室と決まったのである。

いたし方なく今井大隊長は中、小隊長を招集、各作業隊の新編成（鉱山作業隊三個中隊、地上作業隊）を行い私は地上作業隊長として三百六十人を指揮することとなり、このときが名実ともに真の飢えと寒さと苦役との闘いのスタートであった。

## 二、地上作業隊と鉱山作業隊

地上作業を大別すると(1)オックス作業（穴掘り整地及び建築）(2)カーメンカリエル（石割り作業）(3)オーエム（鉄工、鍛冶）(4)ゾーナ（収容所内の雑役）

鉱山作業は三個中隊約六百人が三交代（早朝出勤を一番方、午後二時出勤を二番方、夜出勤を三番方）で、

鉱石を掘り、良石と廢石とに選別処理する重労働である。

昭和二十年も師走に入ると零下三十度、四十度台が続き、ことにオックス、カーメンの地上作業は飢えプラス寒冷、その上日々のノルマが酷で男泣きする毎日、凍傷患者の多発を最も心配し出した時期であった。

凍土を鉄棒で崩し、これを除去して石を割るカーメン作業をはじめ穴掘り等のオックス作業では二時間ごとの休憩十分間も、バラック内でするソ連労働者と異なり、現場の雪の上においての休憩である。また鉱山作業ではソ連の労働係などの日本人いじめが日々に増大してゆくという険悪な状況が続いていた。

私ら中隊長は強引に収容所に申し出て、監督補佐として現場に出勤することを認めさせたのである。

十二月三日私は現場に至り、まず日本の兵士に秘策を伝え、現場監督イワノフに交渉した。「ソ連の人はバラック内で暖炉を囲んで休憩しているのに、なぜ日本人だけ雪の上で休憩させるのか、人種差別はしないとか、世界の人類はすべて平等だといっているのは

偽善か、それとも現場監督の不都合なのかどうだ」：  
理に詰まったイワノフは直ちに了解した。

そして昼の休憩時ベーチカを囲んでいるソ連人に向かい「あなたたちは東京の歌を聞いたことがあるか」と言うとき、もちろんだれ一人知る者はなく「そりゃいい、ぜひ東京の歌を……」と所望したので「日本の兵隊が全員で合唱するので暖炉を日本人に囲ませてくれ」と、口伴奏により軍歌式に復唱し東京音頭を十番まで合唱したところ、コーラス好きのソ連人は監督以下大拍手喝采で、ソ連人にもまして喜んだのは日本人。十分の休憩が二十分となり、暖炉を囲んだ日本の兵士は顔を紅潮させて暖をとり、以来休憩の問題は解決した。

これがオックス作業の成果を収めていく因となり、労務係中尉の笑顔を見るようになったのである。

しかしながら十二月中旬ともなれば気温は極度に下がり零下四十度を上下し、四十度を下る日もあり、凍土の厚みが増し、ノルマ五、八立方メートルの穴掘り作業等は困窮の度を加え、一日三百グラムのパンとどんぶり一杯の水スープ（中味のない）ではいかにして

も無茶苦茶の酷使である。

かくして昭和二十年も終わり二十一年の正月を迎えたが、郷愁の募る異国での新正であった。

収容所内各室の暖炉用燃料（牛馬の糞を乾燥して加工）はなくなり、収容所長に交渉するも「日本人が無計画で使用したからだ」の繰り返しだった。我々が震える夜を過ごした嚴冬の一月、二月であり、半年近くも無人浴のため痒々（かいかい）や夜、毛ジラミの襲撃に悩まされて身のおきどころに苦しんだのもこのころであった。

## 中央アジアバルハシ鉞山

### 苦闘粉塵吸入労働実記

北海道 渡辺健一

#### 一、第一四八師団

私どもバルハシ戦友会は当時関東軍隷下各部隊にいた兵士ですが、終戦直後満州首都新京で再編成された